

勤儉尚武 勤儉尚武

vol. 23

【オーストラリア放浪記】

去る3月12日～29日まで生徒引率で、オーストラリアに行ってきました。留守中、多くの方のご協力で道場を休むことなく稽古できたことを、心よりお礼申し上げます。

18日間のうち最初の2週間は、メルボルンにある姉妹校の教員であるピーター氏の家にホームステイさせてもらいながら、日本での日常と同様、仕事が終わってから、3箇所の道場で合氣道を教え、週末には2日間のセミナーを開催しました。平日の稽古は午後7時から9時までで、終了後ご馳走になり、車で1時間かけてホストファミリーのピーター氏宅へ送ってもらうと、深夜でした。ピーター夫妻の寛大さにも改めて感謝しました。出発前のピーター夫妻から次のようなメールを頂きました。

Hi Yoshi - we know how important it is for you to do your Aikido and also how beneficial it is for the Australian students. Of course we don't mind - you have such a short time here - you do what you want - it is ok with us.

(貴方にとって合氣道をするのがどれほど大切か、そしてオーストラリアの生徒たちにとってそれがどれほど有益な事か私たちはわかっています。もちろん構いません。ここにいる時間はとても短いだからしたい事をしてください。私たちはそれでいいのです。)

これは、平日の稽古と週末のセミナーについてどう思うか尋ねたメールに対する返事です。有難いと思いました。

さて、3年前にアデレードというオーストラリアの別の場所でセミナーを開催したときに現地の人が言っていた「合氣道は合氣道をやっている人にしか技が聞かない」と言っている人がいたとこの勤儉尚武で書いた事を覚えています。とんでもない話で、やはりきちんと伝わっていないと思いました。

まず、合氣道は「争わない心を養う」武道です。技が効く事はもちろん当たり前の事ですが、己の心をコントロールし、相手の心を導くという最も大切な事が理解されていなかったのです。これは、指導者がきちんと伝えていなかったからで、その人のせいではありません。また、技も見よう見まねでやっているのがよくわかりました。これも、言葉できちんと意味を説明しなかった事が原因です。もちろん、言葉だけに頼ってはいけません。いつも稽古中に申しますように、よく「観て」よく「聴く」事がとても大切なのですが、「聴く」為には言葉がわからなければチンプンカンプン(珍文漢文)です。

そのような状況を目の当たりにして、英語できちんと説明し、技をきちんと身に付けてもらうことが大切だと思い、オーストラリアに出かけて行ってセミナーを開催したり、セミナーに来れない人たちのために普段の稽古で教えに行こうと決心したのです。10年前に初めて訪れたアデレードというところで、偶然ホストをしてくれたニックという友人の甥が合氣道をしていると言うので、その道場に連れて行ってもらったのがきっかけで、以来何度か訪れる度、予めネットで現地の道場を調べ、メールで許可を得てから道場を訪ねました。1年前にメルボルンを訪れた時も同様で、オーストラリアを訪れる度に友人が増え、昨年からは年に一度セミナーを開催するから来て欲しいと頼まれました。回を重ねるうちに、現地の様子が少しずつわかってきました。彼らは、流派は関係なくとにかくきちんと稽古がしたいと思っています。

そのような思いから、2010年5月に FRIENDSHIP SEMINAR (友好セミナー) をこの松阪で開催する事を思いついたのです。海外の希望者が、すでに定員の50名を超え、キャンセル待ちの状態です。海外の人たちは、とても楽しみにしています。その期待に答えるためにも我々が技と心を磨き、「さすが本家本元！」と言われたいものです。

まだ1年以上先の話ですが、一人でも多くの方に参加していただきたいと思いますので、今から日程調整に心掛けてください。

AIKIDO FRIENDSHIP SEMINAR 2010

日時：2010年5月2日(土)～4日(月)

場所：松阪市武道館 第一道場及び第二道場



ヴィクトリア州メルボルン市内の風景。**10** 年前に再開された大変美しい都市です。



行って来ました、サーファーズパラダイス。まさに、ゴールドコーストにあるパラダイスのようでした。



仕事で行ったのに、なぜかパブ(宿泊所付の洋風居酒屋)の写真が多い。ここはイングリッシュパブ。これも大切な異文化体験です。



波が高く、文字通りサーフィンには最高の場所で、ホテルもレストランもショップも一杯！でも、合気道セミナーで7月に訪れた時は冬なので、全然違いました。



500 グラムのTボーンステーキ。オーストラリアの食べ物は全て大きい！これでも**30** ドル(1ドル**70** 円)です。



シドニーハーバーブリッジ。



シドニーオペラハウス

Manly Beach へ行くフェリーの中から撮影。



親友コリン氏とイングリッシュパブで、ギネスビールで乾杯！偶然その日は、プロのバンドの生演奏も聞けて二人とも大満足。



メルボルン市内のアイリッシュパブ



21日(土)・22日(日)に行なわれたセミナー。南オーストラリア州アデレードから **John Ward** 氏も参加してくれました。また、合気会からの参加もあり、オーストラリアは流派にこだわらず、リラックスした雰囲気がいいですね。

シドニーロックス地区のアイリッシュパブ。このギネスは最高でした。3〜4回に分けて注がれ、白いクリーミーな泡がとてもきめ細かく、黒いはずのギネスが最初は琥珀色で、少し飲んだ頃に真っ黒に色が変わるのです。日本ではなかなか飲めないですね。

寺子屋愛氣&子供合宿



受身の説明を聞く。何事も基本が大切。



お姉ちゃんに甘える。本当はとても怖いお姉ちゃんだとは知らない純心無垢な子供たち。



筋トレで匍匐前進（ほふくぜんしん）をしているケンちゃんの背中に乗るタクヤ。



受身の基本練習に付き添う伊藤さん。



匍匐前進（ほふくぜんしん）で疲れた祐樹君に飛び乗るタクヤとそれをうらやましそうに見る従姉妹のフミヤ。この2人もあと10年経てば同じ事をされる事をまだ知らない😊



技の練習に付き添う矢橋さん。



おねえちゃんにチョッカイを出すフミヤ。



休憩時間も、年上のお兄ちゃんと雑談しながら縦の関係から色々な事を教わる大切な時間。



でも、きちんと技を教えてくれる優しいおねえちゃん。さすが、プロの保育士!!!



宿泊は、奥伊勢フォレストピアのコテージでした。夕食は、ステーキがメインのコース料理で、子供たちは慣れないナイフとフォークで悪戦苦闘。見かねた大人たちがステーキを切ってやる場面もありました。このような世代間の交流によってお互いに大きな収穫を得たと思います。



今回は、宮川村の昂学園高校の武道場をお借りしました。140畳もある立派な武道場です。とても静かな環境で稽古が出来ました。

当会の基本方針の一つである「上の者（年齢や段・級）が下の者の面倒を見る」事がきちんと機能していました。今回は8名のボランティアの大人が参加してくれました。感謝、感謝!!!

2009年春季合宿



大阪研心館の先輩たちも参加され旧交を温めました。これから、たくさんの人たちと交流が広がる事を願っています。



呼吸投げの説明。投げは、受けの力を受けないようにかわし、受けのエネルギーの流れを止めずに投げる。受けはやはり投げの流れに逆らわずに投げの氣に乗っていく様な受身を！



座技半立ちの説明。投げは姿勢を崩さず、受けは投げの流れに逆らわずに投げの氣に乗っていく様な受身を！



休憩時間のバトル。
やはり女性の方が強いのか？



【大阪研心館の先輩たち】
小柄な女性でも大きな男性を投げるのも合気道の魅力。



お巡りさんになったので、合宿でしか会えなくなったケンちゃん。寂しい〜!!!

真剣勝負

1. オーストラリア放浪の旅から感じること

2 ページ目に「シドニー・ハーバーブリッジ」の写真がありますが、この橋の下を走る海底トンネルのお話をしたいと思います。

「シドニー・ハーバートンネル」は、総延長2,280m（海底部960m）の4車線道路専用海底トンネルで、日本の熊谷組が手掛けた物です。1980年代、日本のトンネル建設の技術は世界で認められておりました。熊谷組は5年間で完成という建設計画をオーストラリア政府に提出したところ、オーストラリアでは全てが遅れる事が当たり前の世界ですので、「きっと10年はかかるだろう」とオーストラリアの人々は言っていたそうです。オーストラリアでは、電車は時間通りに来たら皆驚くほどです。私が今年3月にホームステイをしていた田舎町では、乗ろうと思っていた電車が来ないので、駅員に尋ねると「電車の運転手が忘れていたので、あの電車は来ないから次の電車に乗ってくれ」と言われることもあるそうです。

しかし、日本企業は工期に遅れる事は信頼の失墜につながると考えるので、必死に取り組みます。その結果、約束どおり5年で完成したそうです。オーストラリアの人々は大変驚いたそうです。このトンネルの開通式に先立ち、「トンネルを歩いて渡ろう」という企画が持ち上がりました。日本でも、高速道路の開通に際してこのような催しがあるのはご存知かと思います。ところが、この大工事を計画通り5年で完成したけど、きっと手抜き工事だろうといううわさが広まり、当日は水漏れの恐れがあるという事で、水中メガネをかけたリ、酸素ボンベを背負って歩く人がたくさんいたそうで、新聞にも写真が大きく掲載されたそうです。ウソのような本当の話です。しかし、どこにも水漏れはなく、手抜き工事ではない事が証明されました。1992年の事でした。

翌1993年に、2000年に開催されたシドニーオリンピックのメインスタジアムの建設の入札があったそうですが、オリンピックの場合は、

工事の遅れは絶対に許されませんから、「シドニー・ハーバートンネル」を見事に計画通り完成させた日本の企業の信用が買われ、大林組が請け負ったそうです。この建設は計画より早く完成したので、また、オーストラリアの人々を驚かせたそうです。一方、メインスタジアムの記念碑はオーストラリアの企業が請け負ったそうですが、予想通り、オリンピックが終わってから完成したそうです。

オーストラリアの悪口を書いているのではありません。違いを知っていただきたいのです。オーストラリアでは、時間がゆったりと流れています。そのような文化なのです。例えば、道路建設によって森を分断するような事があれば、カンガルーやコアラのためのトンネルを作る事が常識の国です。環境をとっても大切に国民です。違いを知ってお互いを認め合う事こそが異文化理解であり、国際平和につながると思います。

ですから、セミナーや合宿をする際にもこのようなことに対する配慮が必要です。2010年のフレンドシップセミナーに備えて、皆さんにも少しオーストラリアの文化を知っていただきたいと思います。

日本の学校では、「5分前行動」といって、時間を徹底して守らせます。社会に出ても同様のことが言えます。このような文化が日本企業の技術力、組織力を生んでいるのでしょう。そのような文化で育った我々から見れば、オーストラリアのゆったりした時間の流れは違和感を感じるかもしれませんが、彼らにしてみれば日本人は何てあくせくしているんだろう、と思うかもしれません。**文化に良し悪しはありません。違うだけなのです。**

その意味から、「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」ということにも通じると思います。「敵」ではありませんが、お互い相手のことを良く知りう事が大切だと思うのです。これからもオーストラリアでの体験を皆さんと共有して更に異文化理解の水先案内人になりたいと思います。

2. 日本における外国の文化

バレンタインデーにある女性会員から高級チョコであるGODIVAを頂きました。バレンタインデーはクリスマスと同様、日本に定着した外国の文化の一つです。しかし、本来の意味と違った形で日本に定着しているのを見ると、不思議な感じがします。同様に、多くの日本の伝統文化が外国に伝わり定着しているものや、定着しようとしているのを見ると、首を傾げたくなるものが数多くあります。日本の伝統文化の一つである合氣道を教える者としては黙ってられない事がたくさんあります。

“JUDO”のように、本来は日本の武道であった「柔道」が海外に普及し、オリンピック種目になり本家の日本の柔道のあり方が変わりつつあるのを見ると、人事ではありません。国内外を問わず後世にきちんとした伝統文化を伝える必要性を強く感じます。

そこで、バレンタインデーの起源を考え、日本のバレンタインデーと比べる事によって、外国の文化が如何に本来の形と姿を変えて存在しているのかを考え、その事から日本の伝統文化である合氣道を後世にきちんと伝えていかなければならない必要性について考えていきたいと思いません。

(以下、ウィキペディアより)

【バレンタインデーの起源】

バレンタインデーの歴史は、ローマ帝国の時代にさかのぼる。当時、ローマでは、2月14日は女神ユノの祝日だった。ユノはすべての神の女王であり、家庭と結婚の神でもある。翌2月15日は、豊年を祈願する(清めの祭りでもある)ルペルカリア祭の始まる日であった。ローマ帝国皇帝クラウディウス2世は、愛する人を故郷に残した兵士がいると士気が下がるという理由で、ローマでの兵士の婚姻を禁止したといわれている。キリスト教司祭だったウァレンティヌス(バレンタイン)は秘密に兵士を結婚させたが、捕らえられ、処刑されたとされる。処刑の日、ユノの祭日であり、ルペルカリア祭の前日である2月14日があえて選ばれた。ウァレンティヌスはルペルカリア祭に

捧げる生贄とされたという。このためキリスト教徒にとっても、この日は祭日となり、恋人たちの日となったというのが一般論である。

【各国でのバレンタインデーの形】

恋人たちの愛の誓いの日とされ、世界各地で様々な祝い方がある。

(欧米)

ヨーロッパなどでは、男性も女性も、花やケーキ、カードなど様々な贈り物を、恋人に贈ることがある日である。カードには、“From Your Valentine”と書いたり、“Be My Valentine.”と書いたりもする。

欧米では、日本に見られるような、ホワイトデー(バレンタインデーと対になるような日)の習慣は存在しない。

贈り物の種類はさまざまであるが、チョコレートも贈る習慣は、19世紀後半のイギリスではじまった。キャドバリー社の2代目社長リチャード・キャドバリーが1868年に美しい絵のついた贈答用のチョコレートボックスを発売した。キャドバリーはこれに前後して、ハート型のバレンタインキャンディボックスも発売した。これらのチョコレートボックス等がバレンタインデーの恋人への贈り物に多く使われるようになり、後に他の地域にこの風習が伝わっていった。なお、英語では固形チョコレートはキャンディーの一種として扱われることもあるので、この製品のことを「キャンディボックス」と表記している文献もある。

(日本)

女性が、チョコレートを贈る習慣は日本で始まったものである。欧米でもチョコレートを贈ることはあるがチョコレートに限定されていない。女性から男性へ贈るのみで反対に男性から贈ることは珍しいという点と、贈る物が多くはチョコレートに限定されているという点は、日本のバレンタインデーの大きな特徴である。最近ではチョコレートにこだわらず、クッキーやケーキなどを贈る人もいる。

日本でのバレンタインデーとチョコレートとの歴史は、神戸モロゾフ洋菓子店が1936年2月12日に、国内英字雑誌に「バレンタインチョコレート」の広告を出し、1958年2月に伊勢丹新宿本店でメリーチョコレートカンパニーが「バレンタインセール」というキャンペーンを行った。ただどちらにしても、あまり売れなかったようである。新宿伊勢丹でのセールでは、1年目は3日間で50円の板チョコが3枚、20円のカードを含め170円しか売れなかった。ソニー創業者の盛田昭夫は、1968年に自社の関連輸入雑貨専門店がチョコレートを贈ることを流行させようと試みたことをもって「日本のバレンタインデーはうちが作った」としている。

その後も似たような状況が続いていたが、1960年に森永製菓が新聞キャンペーンを行なうなど製菓会社が積極的に動き出した結果、日本の文化として根付くようになり、現在に至っている。

現在では、日本のチョコレートの年間消費量の2割程度がこの日に消費されると言われるほどの国民的行事となっている。当初は女性が男性にチョコレートを贈ると同時に愛の告白をする日とされていたが、現在では既に交際中の恋人や、結婚している夫妻の間でも行われるようになり、憧れの男性・女性に贈るケースや、上司や同僚、ただの友人などの恋愛感情を伴わない相手にもチョコレートを贈る「義理チョコ」という習慣が定着している。さらには製菓会社のプッシュにより、女性が女性へチョコレートを贈る「友チョコ」、男性が女性にチョコレートを贈る「逆チョコ」という行為も生まれている。「逆チョコ」は1960年と同じく森永製菓が大々的にキャンペーンを行っていることで知られている。

(ゴディバ)

ゴディバの名は、11世紀の英国の伯爵夫人レディ・ゴディバに由来します。シンボルマークである馬に跨った裸婦こそが、重税を課そうとする夫を戒め、苦しむ領民を救うため自らを犠牲にした誇り高き彼女の姿です。領主である夫は領民への重税の免除と引き換えに、彼女に一糸纏わぬ姿のまま、馬で町を駆け廻ることを言い渡したのです。領民たちはそんな彼

女の姿を見ないように、窓を閉ざし敬意を表しました。

ゴディバの創始者ジョセフ・ドラップスと妻ガブリエルは、レディ・ゴディバの勇氣と深い愛に感銘し、1926年ベルギーに誕生した自らのブランドに「ゴディバ」の名を冠しました。

ベルギーのブリュッセルは、古くからチョコレート作りの中心地としてヨーロッパに知られていました。

1926年にドラップス一家が、この地で高級チョコレートを作り始めたことがゴディバの歴史の幕開けでした。「ゴディバ」の名は、ドラップス家の息子であるジョセフ・ドラップスとその妻ガブリエルによって命名されました。ジョセフ・ドラップスは、季節のテーマや折々の出来事に題材を得て、創造性に富んだ粒チョコレートを次々と発表し、さらに、美しいディスプレイやラッピングでウインドウを飾りました。「ゴディバ」の名は瞬く間にベルギー中に拡がり、同時に、チョコレートは高級で個性的なギフトとなったのです。1958年、初の海外ショップがパリのフォーブルサントノーレにオープンし、以来、ゴディバは世界各国で店舗を展開しています。日本では1972年に初の店舗が誕生しました。現在、ゴディバの商品は世界で広く販売されています。

(『ウィキペディア』より)

このように考えると、外国の文化は、その国に定着すると、その国の文化と融合し、その国の人々の都合のいいように変化していくものです。合気道は日本古来の文化ですが、世界中に普及し定着しつつあります。今、きちんと伝えないと、その国の人々の価値観によって姿形を変える恐れがあります。

みんなの力で正しい合気道を伝えたいと強く思います。